中日新聞社賞

今僕にできること

安城市立桜井中学校１年　野口　陽

「津久井やまゆり園殺傷事件から六年。」新聞の見出しにぼくは記憶をたどろうとしたが、よく覚えていない。母に聞くと、とても残こくで悲しい事件だということを話してくれた。詳しく知ろうと思い、インターネットで過去の記事を調べてみたところ、犯行動機に「意思疎通のとれない障がい者は安楽死させるべきだ。」「重度・重複障がい者を養うには莫大なお金と時間が奪われる。」「生産性のない障がい者は社会に必要ない。」などと恐ろしい言葉が書かれていた。僕には全く理解できない動機を知り、恐怖で体が震えた。人権とは何なのか。

僕の通っていた小学校では、年に数回、近くの特別支援学校と交流をしている。元気な子が多く、すぐに走っていなくなってしまう子、急にシューズを投げる子、思うように会話のやりとりができない子、など様々な子がいた。正直、どう接するのが正解か分からなかった。だけど、ゲームで成功すると僕と一緒に喜んだり、笑ったりした。自己紹介で特別支援学校の子が「絵が得意。」と言うと、絵が苦手な僕は、「すごいな。」と思った。「走るのが得意。」と聞くと、「競走してみたいな。」と思った。僕がこの交流で、気づいたことは、障がいがあってもそれぞれ得意なことがあるし、感情が豊かだということだ。事件の記事を読んで、交流で出会ったあの子たちを思い出し苦しくなった。

僕の両親は特別支援学校の教員だ。よく学校の話をしてくれる。楽しい出来事の話を聞くのが僕は好きだし、心から楽しんでいる両親の姿も好きだ。障がいがあっても出来ることはたくさんあるし、僕よりもすごいことができる。こんなにも人の心を動かせるのだと驚きや発見がある。両親と特別支援学校の子たちはお互いに学び合い、支え合っているのだと思う。

僕の母方の祖母は認知症だ。母が言うには、症状が出てから六年ほどになるらしい。家から一歩も出ず、料理や洗濯などもせず、毎日部屋でパンを食べたり、テレビを見たりしているだけだ。最近では、見た目も気になる。いつからか、僕のことを「陽君。」と呼んでくれなくなった。僕が孫だと認識していないようだ。でも、僕たち兄弟が遊びに行くと「かわいいね。」「いい子だね。」と笑いかけてくれる。僕たちのことは脳のどこか奥の方にしまって簡単には引き出せないけど、心の中では必ず覚えていると母は話してくれた。今はもう会話が

かみ合わなくても、小さいころ、たくさん遊んでくれた思い出は僕の心を優しくしてくれる。僕は祖母が大好きだから長生きしてほしい。そして、父方のそう祖母は百三才でほとんど寝たきりだ。介護のために、祖母が自由に外出できる時間は三時間くらいだそうだ。自由な時間が少ない生活で大変そうだなと思った。でも、祖母はそう祖母に優しく話しかけ、ていねいに介護をしている。僕は遠くに住んでいるから年に二回ぐらいしか会えないけど、それでもそう祖母の様子を電話で聞けることがうれしい。「この二人は生産性があるのか。」と、もしそのような質問をされたら、僕は強く言いたい。「心を温めてもらっている。」と。

世の中には、いろいろな人間がいる。ノーベル賞を取るような成果を出している人。世界を動かすような仕事をしている人。テレビやユーチューブで多くの人に影響を与えている人。オリンピックで活躍する人。地域に貢献している人。誰かの支援を受けながら生活している人。誰かの支援をしている人。教えている人。教わっている人。家でずっと過ごしている人。生まれたばかりの赤ちゃん。いろいろな人がいて社会が成り立っている。そして、いろいろな人との関わりの中で僕たち人間の心が動かされている。

「人権とは、人が生まれたときから持っている自由、平等、生存の権利である。」（小学館国語辞典より）

「基本的な人権の尊重とは、人間が生まれながらにして持っている、人間らしく生きるための権利を永久に保障すること。」（小六社会教科書より）

命はみんなに等しく、そして尊い。自分の命も、家族の命も、友達の命も、近所の人の命も、見知らぬ人の命も、地球上の人の命は平等なのだと僕は信じたい。中学生の僕が今すぐにでもできることは、人を思いやること、人に感謝することだ。一人一人が相手をよく理解することで、全ての人の人権を大切にでき、そして守ることにつながるだろう。